

## IV 書評

柏木智子著『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり  
ーカリキュラム・学習環境・地域との連携から考える』  
ー明石書店、2020年ー

京都大学 小松 郁夫

### 1. 子どもの貧困や格差問題と本書の目的と意義

本書は、「子どもの貧困」という重要かつ深刻な教育的課題に対して、学校に焦点をあてて、特にサブタイトルにあるように、「カリキュラム・学習環境・地域との連携から考える」という考察を、事例調査研究の成果も交えて、理論―事例―結論（政策提言）を構造的に追究したものである。本稿では、書評という一般的なノルマを踏まえつつ、比較的紙幅も許されているので、さらに本書を理解するための要点などについても触れながら、少し掘り下げた考察を試みることにしたい。具体的には、本書の理解に有益と思われる著者自身のこれまでの研究経歴を分析し、研究者としての個性的な側面や現段階での研究成果の到達した状況を把握し、今後への期待を込めた研究の将来像を私なりに「勝手に」思い描いてみたい。

### 2. 本書の構成と概要

#### (1) 本書の目次

全体で272頁に及ぶ本書は、以下に示すように全10章の理論編、事例編、結論編のⅢ部構成となっている。

#### 目次

はじめに：本書のねらい

#### 第Ⅰ部 理論編

第1章 子どもの貧困の理論と実態・・・2頁

第1節 貧困とは何か・・・2

第2節 子どもの貧困の実態と帰結・・・9

第3節 子どもの貧困とその対策・・・21

第2章 問題の所在と本書の目的・・・29頁

第1節 子どもの貧困への対策を滞らせた自己責任論・・・29

第2節 日本の学校文化の諸相——何が問題か・・・31

- 第3節 貧困状態にある子どもに対応する教師・・・37
- 第4節 子どもの排除を生み出す学校文化と教師の抱える難問・・・41
- 第5節 学校文化受容に関する調査研究の必要性・・・44
- 第3章 「ケアする学校」の理論的視座・・・49 頁
  - 第1節 学校文化の変容のための平等観の転換・・・49
  - 第2節 共通認識の必要性・・・54
  - 第3節 「ケアする学校」の理論的検討・・・59
  - 第4節 作業課題の設定・・・69
- 第Ⅱ部 事例編**
- 第4章 調査の概要・・・76 頁
  - 第1節 調査方法・・・76
  - 第2節 事例調査の記述・・・77
  - 第3節 調査日時等の表記について・・・78
  - 第4節 子どもの貧困の基準・・・79
  - 第5節 調査対象校選定の基準・・・79
- 第5章 桜小学校におけるケアの取り組み：貧困に抗するカリキュラム・・・81 頁
  - 第1節 本章・次章のねらいと調査対象校の概要・・・81
  - 第2節 201X年度桜小学校の地域学習——子どもたちの抱える問題と学習の目標・・・83
  - 第3節 3年生：「考えよう、わたしたちのまちⅠ」——地域の施設見学を通して・・・87
  - 第4節 4年生：「考えよう、わたしたちのまちⅡ」——地域の施設見学を通して・・・95
  - 第5節 5年生：「こんないいまちやったんね」——地域のよさを発見し、伝える活動を通して、自分も友だちもまちも大好きになろう・・・101
  - 第6節 貧困問題をテーマとするカリキュラム・・・115
- 第6章 桜小学校におけるケアの取り組み：貧困に抗する学習環境づくり・・・124 頁
  - 第1節 物質的な学習環境づくり・・・124
  - 第2節 文化的な学習環境づくり・・・126
  - 第3節 関係的な学習環境づくり・・・129
  - 第4節 子どもの落ち着き・・・131
  - 第5節 保護者への支援・・・138
  - 第6節 ケアする教師の育成と苦悩への相互支援・・・139
  - 第7節 校長のマネジメント・・・141
  - 第8節 桜小学校におけるケアの取り組みの総合的考察・・・142
- 第7章 海小学校におけるケアの取り組み・・・152 頁
  - 第1節 本章のねらいと調査対象校の概要・・・152

- 第2節 海小学校の教育方針と学習環境づくり・・・154
- 第3節 教師の子どもへのかかわり・・・157
- 第4節 貧困に抗する「まちづくり学習」の目標と指導計画・・・161
- 第5節 「まちづくり学習」の記述と分析・・・162
- 第6節 子どもの地域認識の実態とケアの取り組みの総合的考察・・・196
- 第8章 光中学校におけるケアの取り組み：ケアする教師へのケア・・・207頁
  - 第1節 本章の目的と問題意識・・・207
  - 第2節 調査の方法・・・208
  - 第3節 事例研究・・・209
  - 第4節 ケアする教師へのケアのための組織的要件・・・220

### 第Ⅲ部 結論編

- 第9章 「ケアする学校」の諸要件・・・226頁
  - 第1節 貧困に抗するための三つの要件・・・226
  - 第2節 「ケアする学校」に必要なカリキュラム・・・231
  - 第3節 「ケアする学校」で重視される教育の方法・・・235
  - 第4節 「ケアする学校」の組織的要件と行政支援・・・240
- 第10章 「ケアする学校」の普及に向けての提案・・・248頁
  - 第1節 ケアする教師の放課後・・・248
  - 第2節 学校の組織体制への提案・・・250
- おわりに・・・259
- 参考文献・・・263

## (2) 本書の叙述構成とその意義

本書は理論編、事例編、結論編と3部構成である。第I部は、全体として社会問題としての貧困の中で、特に「子どもの」貧困に関する理論的なことなどを整理している。子どもにとっては、どのような環境の下に生を受けるかが自分の意思ではどうすることもできないことであると同時に、成長するある一定期間に関しては、主体的にはいかんともしがたい状況が多くを占めている。それゆえ、それぞれの子どもに関わる全ての人間や組織、社会などがどうあらねばならないかが大きな課題であると考えられる。この部分ではさらに、学校というシステム、特に「日本の」学校がどのように子どもの貧困とかかわってきたのか、あるいはかかわってこなかったのかを学校論や学校文化論として考察している。その上で、本書の核心的概念としての「ケアする学校」の意味付けを行っている。

学校には、「ケアする」という機能のほかに、本来は「人格の完成」に関わり、学習指導等を通じて、個々人の資質能力、個性を伸長させることに関わるという機能があるはずである。しかし、

子どもの貧困への学校や教師の関わりを考察する立場からは、この「ケアする」という機能を重要視する必要があり、本書はそのことに焦点化してまとめられた研究の成果である。

第Ⅱ部は、研究の基礎となった調査についての考察である。特に貧困に抗するカリキュラムと学習環境に焦点があてられている。学校段階として、特に小学校に注目し、貧困状態にある子どもへの対策としては、子どもに対する早い段階からの支援が、その後の貧困対策の有効性にも影響を与えるという仮説の検証が試みられている。本書では、第8章で中学校に対する調査研究もおこなっているが、研究の視点としては、貧困対策としての学校というシステムの意義や活用を視野に入れており、その後の将来にわたる貧困問題のトータル・システムでの取組も視野に入っていることがうかがえる。またこの第8章ではカリキュラム、学習環境に次ぐ、第三の視点としての学校の組織体制（組織的要件）を解明している。

第Ⅲ部は結論部分、政策提言的部分として、カリキュラム、学習環境、組織体制の3つの観点からの具体的な提言や提案があり、本研究が学校組織論的研究、学校経営的研究としての範疇で注目すべき研究成果を示していることが評価できる。1冊の著作物の中で、研究課題に関わる全てのテーマを解題し、実証的な調査研究を踏まえて、実践的な提言にまで至るのは、並大抵のボリュームではカバーできないものであるが、272頁の中でかなり要領よくまとめられている。改めて論理構成、叙述の流れなどが体系性をもってまとめられているのではないかと感心する。

著者は、「はじめに」の部分で、子どもの貧困対策を学校と教師に求める意図として、特に2点強調している。第一は、「教師個人の担うべき職務の一方的拡大を是認するものではない」（iii頁）という留意点である。著者の他の研究でも、働き方改革を意識した研究にかなりの注意が払われており、いろいろな場での研究発表の「批判」に対しても、この点を明確に主張している。著者が目指したのは、「学校が公的機関として、子どもの学びの保障という責任を果たしながら、一教師の負担をいかに軽減するのかを問う視点を含むもの」（同）という研究姿勢である。確かに、著者の意図はどうかあれ、「ケアする学校」の構築を目指せば、「批判」されるような厳しい実態へと向かいかねない状況が、今の学校には危惧されるともいえる。提案には「チーム学校」の改革プランも視野に入っており、教師以外との連携は著者が期待する改革プランの1つになっている。

第二の留意点も著者の研究対象と関連している。著者は伝統的な学校以外での「学び」についても理解を示し、「学校だけが子どもの学びの場であり、学校からの離脱を絶対的に避けなければならない逸脱行為だと捉えているわけではない点」（iv頁）という見方をとる。学校以外での学びの場についての肯定的見かたがあり、学校以外の学びの場や学びの方法に対する優しいまなざしを感じ取ることができ、著者が「子どもの貧困」に向けている心情をも反映していると理解できる。

それでも、本研究では学校をプラットフォームと捉え、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーと言った専門スタッフ、あるいは保護者・地域住民と教師とのチームによる貧困対策への総合的なアプローチ方法を提示している意義は深いと受け止められる。

### 3. 貧困 コ 子どもの貧困 ⇔ 家庭・学校・地域 ← 政策・行政

#### (1) 市民社会の社会的課題としての貧困

第1章の「子どもの貧困の理論と実態」は、テーマが巨大なために、章のタイトルの文字通りで読み進めると、やはり物足りなさを感じる。冒頭の「日本で貧困が問題視され始めたのは、2000年代に入ってからである」（2頁）というのは、あまりにも乱暴な書き出しであると思う。どこの国や社会でも貧困はあらゆる面で重要な課題である。子どもの貧困が21世紀に入ってから問題となり、深刻化したわけではないことは自明であろう。子どもが貧困ゆえに、学ぶ機会を奪われ、辛く厳しい生涯を送らなければならなかった事例は無数にある。目の前の子どもの貧困からくる学びの困難さについて、戦後教育史に限っても優れた実践記録がたくさんあるのではないかな。

現行憲法下でも、社会の貧困とそれに起因する子どもの貧困と学びの剥奪は常に指摘されてきたテーマでもあった。筆者自身の卑近な例でも、中学の同級生が家庭の貧困などを理由に高校進学をあきらめたり、進路を変更せざるを得なかったケースを何人も見てきた。現代の「子どもの貧困」にスポットライトをあてるのは良いとしても、私が期待するのは、なぜ2000年代になって「新しい」子どもの貧困が重要な政策課題になったのかという点である。それまでの時代と何がどのように違うのか、その点の解明無しに、「子どもの貧困」を真新しい社会問題のように考察するのは、歴史の連続性や発展性を軽視する見かたなのではなからうか。

考察の順序や論理性としては、社会問題としての貧困を押さえたうえで、その部分集合としての「子どもの貧困」をあぶりだし、どのような特殊性があるのかを整理すべきではなかったか。社会問題としての貧困や大人の貧困は、ある意味で主体的なテーマでもあるが、子どもの貧困は、他律的で他者依存的性格のものであろう。「貧困 コ 子どもの貧困」の関係（「子どもの貧困」は（社会の）貧困に含まれる）を論理的にも整理して欲しかったと考える。

本書の冒頭部分で、著者は「民主主義や市民社会の形成に寄与しうる学校の価値」（i頁）という表現を使っているが、こうした言説は、2000年の1世紀も前から教育論としても自覚されてきた命題である。知りたいのは、なぜ現代まで、それが無視や軽視されてきたのか、教育学はそれらを取り扱ってこなかったのかという疑問である。また、さまざまな困難を抱える子どもに対して、学校は何ができるのか、あるいは、何をすべきなのかを問い、子どもたちの「学校生活への包摂」がいかにして可能となるかを述べたい、というまえがきが出てくるが、この点でも、教育史のさまざまな場面で、その苦労に挑戦してきた優れた教育実践家を私たちは知っているし、素晴らしい功績を挙げている人も少なからずいる。本書全体を通して、「排除型社会における教育の機能不全と指摘される状況を少しでも解消し、包摂型社会の形成や公正な社会の創造への学校の貢献を示したい」（同）という著者の熱い思いは伝わってくるものの、包摂型社会論の現代的意義などについての説明は物足りなさすぎるのではないかな。

問題は、子どもの学習に関して学校があまりにも強大となり、「飽学校教育」の時代を経て、子

どもが学校から排除されたり、不適応を感じ、学校自身が機能不全となっている問題を丁寧に解き明かすことが重要ではなかったか。「貧困 ⇄ 子どもの貧困 ⇄ 家庭・学校・地域 ← 政策・行政」の論理性を明確にすることが本題だと考える。本書で指摘するように、子どもの貧困には、「家庭・学校・地域」が複合的に関わっており、そうした厳しい状況に政策や行政がどのように立ち向かうべきかが非常に重要な課題である。本書はそれに対して、非常に説得的な考察を進めてはいるが、貧困をめぐる歴史的、社会的状況については、ややあっさりとして処理しているのは物足りなさすぎる。著者を含め、最近の研究が2014年の「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を契機に、にわかに活発な研究を推進してきているように感じるのは、政治や政策に依存し過ぎであり、研究の先進性や先導性に物足りなさを感じざるを得ない。

## (2) 国民国家の課題とグローバル化する貧困の根深さ

貧困の問題は、依然として国民国家の最重要課題の1つであり、国家内に国民としての共通性や協働性、連帯感を涵養するうえで必須の政策課題である。長い間、諸外国では階級格差や階層格差などとして問題視され、社会改革運動の要因ともなっている問題状況である。しかし、経済のグローバル化が進展し、国家間の貧困や格差が深刻化し、搾取や差別が解消や縮小するのではなく、むしろ拡大し、一部の富裕層が国境を越えて富の独占と支配を強化している現実がある。また、人々の労働市場での移動や紛争の深刻化、人権侵害等による難民の増大などで、貧困や生命の危機すらも強く危惧される状況が発生している。

本書が究明している地域格差や差別と偏見などがもたらしている子どもの貧困問題は、グローバルに観察をすれば、民族・人種や宗教の問題、言語や風習を含む文化的問題など、複雑で多岐にわたる要因を内包している。虐待などという人権侵害、教育費不足などによる学習権保障の不完全な状況、ヒト・モノ・カネなどの経営要素の不整備など、課題を挙げればきりがない。本書が対象とした日本の現実にも、早晩、グローバルな社会を悩ませているこれらの要因は、押し寄せてくるものと想像できる。本書の研究が、今後どのように広がりを見せていくのか、まだ本書の内容からだけでは、軽々しく想像はできない。本書が結論部分で、子どもの貧困問題に、誰が、いつ、どのように取り組むかということを実証的に議論し、一定の提案までまとめているのは、本研究の特長の一つとして、高く評価できる。特に、教師の中心的な業務としての学習指導に着目し、教師のなしうる貧困対策を具体的に提示している点は、現場で苦労を重ねている学校関係者には、力強い応援歌とも言える役割を果たしているのではないかと。臨床的学校経営研究の意義が本書には盛り込まれていると評価できる。

## 4. 著者の研究経歴から見えること

### (1) 研究の目指すものが「学校経営研究」の根幹に通じる

「立命館大学 研究者学術情報データベース」に著者は「研究概要」の自己紹介として、研究テーマとして、「子どもの貧困とケアする学校づくり」、「学校と地域の連携とコミュニティづくり」、

「格差是正と包摂型コミュニティの創造」の3点を挙げている。その上で、自身の研究内容を2点に絞って、「子どもの貧困」と「学校と地域の連携」について、次のように紹介している。

まず、子どもの貧困については、

1. 「子どもの貧困」に関する研究をしています。経済的困難を抱える子どもが学校や地域でどのように過ごし、そうした子どもを教員や地域住民がどのように支援しようとしているのかを調査しています。学校であれば、排除をなくし、ケアする学校をつくるにはどうすればいいのか、カリキュラム、学校の学習環境、教員組織、学校と地域との連携などの視点から考えていくつもりです。また、地域では、子ども食堂や学習支援の活動を調査し、格差を是正する包摂型のコミュニティづくりについて研究しています。

と語っている。

注目されるのは、子どもの貧困を考える際に、彼らが「どのように過ごしているか」と周りの大人が「どのように支援しているか」という2点を中心に実態把握、現状分析を現場での調査によって把握しようとしている点である。社会問題を理想論や観念論、イデオロギーからではなく、リアルな現実を体感し、当事者たちに寄り添いながら問題の本質に迫ろうとする研究姿勢が具体的な研究方法にも反映している様子が理解できる。研究テーマの追求に、理論編と事例編を一体的に取り組んでいる姿勢が徹底されていることが、この研究概要にも紹介されている。

もう1つの学校と地域の連携についても見てみよう。

2. 子どもの学校での学習や経験を豊かにするための学校と地域の連携について研究しています。そのために、子どもが学校内で、学校外でさまざまな人々とつながること、そして教員と保護者、地域住民、その他さまざまな活動をされている方々がつながって、子どもを支援するためのネットワークを作ることが大切だと考えています。どうすれば子どもを豊かにするつながりが作れるのか、あるいはどんなつながりがいいのかを理論や調査から明らかにし、教育を通じてのコミュニティづくりについて追究しています。

ここでは、学校の内と外での人と人とのつながりに着目し、教員・保護者・地域住民などの大人がそれぞれにどのような活動をしているのか、どのようなつながり、ネットワークを構築しているのかに研究の焦点をあてている。学校研究や学校経営研究に際して、学校内だけではなく、学校外に同時に着目した上で、学校づくりや学校経営を研究する手法は、実は吉本二郎先生の終生の研究手法であり、東京教育大学を定年退官する時に設定した最終講義のテーマそのものである。著者が吉本学校経営学を学んだかどうかは不明だが、本誌の「大塚学校経営研究」の神髄にも通じる非常に重要な本質を内包した研究を著者は発展させているように評価できる。

## (2) 学校への焦点化とその意義と課題

子どもの貧困という政治的課題、社会問題のテーマを教育学研究の方から接近し、特に「カリキュラム、学校の学習環境、教員組織、学校と地域との連携などの視点」から考察を進めている著者の研究は、学校経営学研究の中核をなすテーマをとらえており、カリキュラム研究、学習「環境」論、教職論、学校の公共性・地域性・ステークホルダー研究として、多方面に展開し拡大できる研究の素地を創り出していると読み取ることができる。

著者の研究の中に見られる、学校の「再定義」とか、ICT 活用を含む未来の学校の姿の考察、ノン・フォーマル教育などの多様な学びの場への注目なども、学校と言うものに対する著者の複眼的な視座が読み取れ、それぞれの研究を同時並行的に進めながら、近い将来には子どもの成長や自己形成に関わる学校論のトータル・システムでの再定義と未来に向かっての独創的な提案なども期待できるのではないかと楽しみになる。

これまでの学校に関しては、公共性、計画性、組織性、専門性、固定した施設での定型性などが当然のこととして考察されてきたが、子どもの貧困への総合的な取組を、意義があり、効果的なものにあらしめるためにも、そうした概念をもう一度再考することの重要性を著者の研究は問題提起しているとも受け止められる。

教育政策の研究にも関心を持つ筆者の意識からすると、欠かせない視点に、公教育機関の中心としての学校の「権力性」やイデオロギー性などにも注目して欲しいと期待する。近代学校の成立以降、学校が内包するこの権力性に関しては、歴史上何度か厳しい批判にさらされた経緯がある。基盤となる政治経済体制の抜本的な転換を目指したロシア革命後の社会主義的教育改革論からの批判、1960年代後半からの脱学校論からの批判、中国文化大革命での知識人や大学などへの批判、SDGsなどで表現された発展途上国などからの先進国型の学校に対する批判、さらにはイスラム教などに見られる宗教上の思想からの批判など、学校という教育形態がなかなか払拭しきれない独特な教育システムの在り方については、一筋縄ではいかないであろうが、研究の視野の中に位置づけておく必要があると考える。

特に著者は最近の研究で、外国にルーツを持つ子どもの貧困や学習などについての調査研究も進めているが、その本質を見極めるためには国民性や民族・人種性、さらには文化・宗教的な背景を織り込んだ分析と考察は避けて通れない視点ではなかろうか。こうしてテーマへのアプローチについても、研究成果を挙げられることを期待したい。

## 5. 今後への期待

### (1) 科学的知識とそうでない知識

本書を含む著者の研究手法は、近年の行政学や経営学の研究において重視されている EBPM (Evidence-Based Policy Making) の観点、すなわち「エビデンス (証拠) に基づいた政策形成」に立つ研究であることは間違いない。本題のようなテーマに迫る場合にエビデンスとは、実態を



つぶさに観察し、研究対象に寄り添って丁寧に状況の認識と記述などを積み重ねることによって表出する事柄の積み重なったものと考えられる。その上で、科学的な説明を着実に実施しようとするれば、研究者自身の経験、すなわち「観察、実験、調査」などをできるだけ詳細に参照することが要求される。そこで得られた情報、データを一定の視点から収集・整理して、一つのまとまりをなしている科学的知識に統合し、記述することで、研究内容が可視化され、研究者本人の認識を通して、把握された科学的真理として磨かれることになるものとする。

学問領域の範疇からいえば、物理学⇒化学⇒生物学⇒心理学というような順序性でフuzzy（曖昧な状況）な要素が増大し、教育学などは最も複雑性をはらんだ研究対象を取り扱うこととなるのではなかろうか。本書で分析と考察を行っている「子どもの貧困」は、子ども自身とその成育環境の複雑さと多様性を把握した上に、さらにはそれに関わる教員等の他者の主体性や関係性が多元関数的に高度化しているゆえに、一気に全体像を解明することは、当分の間不可能と覚悟する必要がある。しかし、だからと言って、本書で展開されている分析と考察が無意味なわけではない。むしろ、絡み合った複雑な諸要素を根気よく解きほぐしているかのような学びを与えてくれる本書の研究こそ、目的地までは遠大なようで意外に近道であると期待することができるのではないかと。本書は読み解くプロセスで、読者にそのような期待や希望を与えてくれる研究成果を提示しているものと高く評価できる。

そもそも、科学的知識は、どのように生み出されるのであろうか。それは、「科学的」探究によるのか、それとも諸事実の積み重ねによる帰納的プロセスによるのか、はたまた、偶然に生み出されるものなのか、非常にむずかしい疑問である。しかし、少なくとも本書から得られる知見では、研究で示された成果を根拠や証拠として活用して重要な結論に到達し、課題解決に向けた示唆を獲得した内容を提示ししていると評価できる。